

経済学の「形容矛盾」と「価値導出」の意義

一橋大学大学院社会学研究科博士課程

岡 　　はる代

1. はじめに

『資本論』第一章第一節「商品の二要因：使用価値と価値（価値実体、価値量）の中で、いわゆる「価値導出」と呼ばれている分析を開始するにあたり、マルクスは次のように経済学の「形容矛盾」ということを指摘している。

「交換価値というものは、何よりもまず、ある種の諸使用価値が他の種の諸使用価値と交換される量的な関係ないし比率として現われている、すなわち時と所によって永続的に変化するような関係として現われている。それ故、交換価値とは何か偶然で純粋に相対的なもののように思われ、かくして商品に内的な、内在的な交換価値(固有の価値)などというものは形容矛盾(contradictio in adjecto) のように思われるのである。我々はこの事柄をもっと詳しく考察しようではないか。」と。⁽¹⁾

本稿では、この「形容矛盾」という事柄を分析し、それとの関連で、「価値導出」の分析の意義を考察する。まず、エンゲルスによる「形容矛盾」に関連する指摘を取り上げ、次いで、アルチュセールの『資本論』読解における「問わず語り」の取り扱いを考察し、S. ベイリーのリカード批判とマルクスによるその評価を検討して、『資本論』本文の分析をしたい。本稿の論究の対象としたのは、『資本論』第一章、第一節である。従来、マルクスの価値論と言えば、その精髓は第三節「価値形態」論にあると目されることから、第一節における古典派経済学批判はあまり強調されてこなかった傾向があり、「価値導出」における古典派経済学の取り扱いを再検討することは、重要な意義を持つ課題と思われる。

2. 「形容矛盾」とは何か——エンゲルスの示唆

エンゲルスは『資本論』を理解する上での困難を、その諸用語の独自性と結びつけている。

「我々が読者のために除くことのできなかつた一つの困難がある。すなわち、日常生活の語法とちがっているだけでなく、通常経済学のそれともちがっている意味に、ある種の表現が利用されていることである。だが、これは避けえないものであった。ある科学の新たな見解は、すべて、この科学の専門用語に⁽²⁾おける革命を内包している」と、エンゲルスは言う。

すなわち、『資本論』の諸用語は、「日常生活」及び「通常の経済学」とは違った用方をされており、その差異は科学の本性上避けられないものと言われているのである。そして、科学とその諸用語とのこのような関係を理解しなかつた経済学は、「商業生活や工業生活の言葉があるがままに用い、またこれで操作することに満足した。この場合、経済学は、このようにすることによって、これらの言葉で表わされる思想のせまい限界内にとどまってしまうようになる⁽³⁾ということ、まったく看過していた」というのである。

エンゲルスはこの事情を化学の歴史を例にとって説明しているので、この類比を検討しておきたい。

「燃焼」という現象は、ある物質に酸素が結びつくことであると現在では説明されるが、18世紀末には、まだ「燃素説」が支配的であった。この学説によれば、燃焼とは、燃焼体からある仮説的物質、すなわち「燃素」と呼ばれた「絶対的可燃元素」が、分離する過程であると説明されていた。この学説によって、当時は知られていた化学現象の大部分が説明可能であった。ところが、1774年に Priestley がある気体を析出してしまったのである。その気体は普通の空気よりも「純粹」で、つまり「燃素を混じていない」ものであった。そこで、Priestley はその気体を「脱燃素気体」と名づけた。その後、Sherrill が同じ気体を析出し、その気体の中で物体を燃やせばその気体が消滅するということを発見して、この気体を「火気体」と呼ぶけた。Sherrill は、燃素が空気の成分の一つと結合する際に生ずる化合物は、火または熱であって、それがガスを⁽⁴⁾通して逃げるのだと、考えた。

エンゲルスによれば、「Priestley も Sherrill も酸素を析出したのであるが、しかし、自分たちが手にしたものが何であるかを知らなかつた。彼らは、

『彼らの眼前にあった』燃素説の『諸範疇に囚われたままだった』。全燃素観念を覆して化学を革命するはずの元素も、彼らの手中では実を結ぶことなく終わった。だが、プリーストリの発見を聞いたラヴォアジエは、「この新たな事実を手掛りとして、全燃素化学を研究し、そこで初めて、かの新たな気体は新たな化学元素であるということ、そして、燃焼においては、不可解な燃素が燃焼体から出ていくのではなく、この新たな元素が燃焼体と化合するのであるということ」を発見し、かくして、その燃素説形態では頭で立っていた全化学を、初めて脚で立つようにしたのである。……ラヴォアジエがプリーストリとシェーレに対する関係は、そのまま、剰余価値学説において、マルクスがその先行者たちに対する関係である⁽⁵⁾」という。

この両者の関係の共通点はどこにあるのか。エンゲルスによれば、「我々が今剰余価値と呼ぶ、生産物価値部分の存在は、マルクス以前から久しく確認されていた。また、それが何から成り立つか…ということも、大なり小なりの明瞭さで述べられていた。しかし、それ以上には出なかった」。だがマルクスは、「先行者たちがすでに解決を見たところに、ただ問題のみを見た」。つまり、「ここで肝要なのは、一経済的事実の単なる確認でもなければ、この事実と永遠の正義及び真の道德との衝突でもなく、全経済学を変革すべき使命をもつ、そして全資本主義的生産の理解のための鍵を使い方の心得ある者に提供する、一つの事実であるということ」をマルクスは見た。そして、ラヴォアジエが酸素を手掛りとして全燃素化学を革新したのと同様に、マルクスもまた、「この事実を手掛りとしてすべての既存の範疇を吟味した⁽⁶⁾」、とされている。

以上のような、エンゲルスによる説明は、次のように要約できよう。第一に、科学上の根本的に新しい理論は、従来のものとはまったく異なる用語ないし用語法を必然的に伴うということ。従って、その差異を理解することが、『資本論』理解上極めて重要であるということ。第二に、プリーストリとシェーレが酸素を析出したように、古典派経済学も、剰余価値の「存在」という「経済的事実」を「確認」していた。すなわち、剰余価値と今呼ばれているものを、「すでに手にしていた」にもかかわらず、それを「正しい名で呼ばず」、「利潤」・「利子」・「地代」といった、日常生活用語でしか考察しなかったために、狭い理論的な立場にとどまったのだ、ということ。第三に、剰余価値は、酸素と同様に、「全経済学を覆す」べき決定的な意義を持つ「事実」である、という

ことである。

さて、ここにはいくつかの曖昧な点がある。その点を明らかにしながら、このエンゲルスの譬え話の意義を考察しておこう。

まず、第一に、この化学の例と経済学の例とは、いかなる点で同一視されているのだろうか。プリーストリとシュレーが、後に酸素と呼ばれる気体を析出したということと、古典派経済学が、後に剰余価値と呼ばれるものの存在を確認していたということは、両者ともに「事実を手にしていた」と言われているが、果たして同一視できるのだろうか。経済上の事実は、酸素のように、フラスコに入れて手に持つというような意味では、「手にする」ことはできない。だが、我々が、そのようにして手に持った気体が酸素であると認識するのは、どのようにしてなのだろうか。我々の眼前にあるのは、その気体に関するいくつかの実験の結果であろう。そして、その結果は、何らかの言語によって表現されざるをえない。この点では、経済上の事実も同様である。我々が剰余価値と呼ばれるものの存在に触れるのは、何らかの形をとったその表現を介して以外の方法ではありえない。古典派経済学もマルクスも（プリーストリとシュレーもラヴォアジェも）「事実を手にしていたにもかかわらず」、前者が科学の全体系を覆すことになったのに対して、後者は既存の理論の古い枠内にとどまった、とエンゲルスが述べているのは、両者の差異が、この事実の表現にあるのだと言わなければならないのである。そして、「脱燃素気体」、ないし「火気体」と「酸素」、あるいは、「利子」等と「剰余価値」という命名（表現様式）の差異は、全理論体系の根本的な差異と必然的に結びついており、だからこそ「諸用語」の理解が困難なのだ、と主張されているのである。このような、表現様式の変更の例として、二つの例は同一視されているのである。そして、この点がこの譬え話の眼目である。

しかし、エンゲルスは、今述べたこととは違った意味の説明を加えているようにも見える。これが第二の疑問点である。すなわち、エンゲルスは「酸素」と「剰余価値」に決定的な意味を与えており、古い理論の全体を覆すべき「使命を持った」「事実」の「発見」こそが、新たな理論の確立の条件であり、この「事実を手がかりとして」、諸範疇のすべてが再検討されたと述べているように思えるのである。だが、このように考えるならば、先行者達は同じ事実を、「脱燃素気体」とか「利子・利潤・地代」という名の、既存の理論体系をむし

る補完するような事実としてしか把えなかったにもかかわらず、同じ事実が何故マルクスやラヴォアジエにとっては決定的な手がかりとなったのか、ということとは明らかにされない。何故に、マルクスやラヴォアジエが科学の全体を革新することができたのかという問題は、科学の革新のための諸条件は何か、という問題である。そこには様々な諸条件の複合が考えられるが、それらを明らかにすることは、科学史の歴史的な研究にかかってくるものであろう。だが、このような歴史的な問いは本稿の課題ではない。本稿の課題は、マルクスによってなされた表現の変容がいかなるものなのか、を明らかにすることである。

その際、古典派経済学の表現様式のいわば「裂け目」としての「形容矛盾」を分析することが肝要であると思われる。エンゲルスの例によれば、酸素を「脱燃素気体」と呼んだ、燃素理論による混乱の命名にも匹敵する、古典派経済学の「形容矛盾」に、マルクスは経済学の理論体系の「矛盾」を見てとったのである。エンゲルスのたとえ話は、このような命名法の問題に、我々の目を向けさせるのである。

3. アルチュセール学派の「裂け目」(rupture)、「問わず語り」

アルチュセールは、かつてこのエンゲルスの解説を高く評価し、「用語」(言語表現)の問題を掘り下げた。アルチュセールによれば、『資本論』とは、古典派経済学のテキストのマルクスによる読解(lecture)の書でもある。すなわち、『資本論』のテキストそのものの中に、古典派経済学のテキストが(変容させられた断片という形であれ)含まれているというのである。この主張は、『資本論』というテキストの性格に関して、次のような認識を与えてくれる。

つまり、『資本論』とはマルクスが倒達した「科学的な成果」を、彼以前の「前科学的」な理論とはきっぱりと区別されたところで、一から展開するというような、純粋な真理のテキストではない、ということである。古典派経済学のテキストを分析することは、マルクスの探究の上ばかりではなく、叙述の上でも必要不可欠なものであった。マルクスにとって、経済学者達の論述への言及は、エンゲルスが言ったように、「いつ、どこで、誰がこの見解を最初に語ったか」を示すためや、「理論的負債」の在り処を示すためではなく、叙述の要請上欠くことのできないものなのである。我々が新たな対象を表現しようとする時、我々の前にあるものは、日常生活と既存の理論の地盤の上で、既に

成立している諸観念——経済学であれば「経済的なもの」等——と、その理論の問題意識の構成と必然的に結びついているような諸用語及び用語法である。我々は、これらを用いながら、これらを変容させていくことによってしか、新たな対象を表現することはできない。だからこそ、マルクスは、経済学者の語る言葉に即して、あるいは日常生活の諸用語に即して、それらを用いながらそれらに介入し変容させていくことによって、自己の研究の対象を表現するのである。それ故、対象の分析は経済学の語りの分析と不可分の関係にある。『資本論』は、経済学の分析を提示しているようなテキストなのである。

さて、アルチュセールは、「賃金論」の章の中で、古典派経済学のテキストを分析するマルクスを取りあげた。マルクスはここで、「労働の価値（実は価格）とは何か」という誤った問いを立てた古典派経済学が、その問いに答える中で、思わず「労働力の価値」——正しい名で呼びはしなかったが——を語ってしまふという「問わず語り」を指摘しているとされる。アルチュセールによれば、「古典派経済学は……『労働』の価値は『労働』の再生産に必要な生活必需品の価値に等しい、という正しい答えを『生産した』。……この答えは、ただ問いが提起されていないという唯一の欠点をもつ問いに対する正しい答えなのである。古典派経済学のテキストが定式化した初めの問いは、労働の価値とは何か、であった。その答えは、『労働（……）の価値は労働（……）の維持と再生産に必要な生活必需品の価値に等しい』、である。答えのテキストの内部には、二つの空白、二つの不在がある。（そのことを）我々に見せてくれるのはマルクスである。しかし、マルクスが、そうすることによって我々に見せてくれるのは、古典派のテキストそのものが語らずして語っているもの、語りつつも語らざることでしかない。……古典派のテキストが沈黙していると我々に語るのは古典派のテキストそのものである。」⁽⁸⁾とされている。

問いが立てられていないにもかかわらず答えが正しい、ということは、この答えが別の問いに対する答えだからである。古典派は、問いが欠落した新しい答えを生産しただけでなく、この新しい答えの内部に「空白」としてある「潜在的な新しい問い」をも知らぬ間に生産した。この新しい問いの潜在的な生産は、古典派の理論の地盤全体を変容させるべきものではあるが、いまだこの変容の「不安定な指標」であり、「徴候」であるにすぎない。燃素理論における酸素の「生産」と同じように。このような、「問いのない答え」、「問わず語り」、

が潜在的にせよ「生産」されていると、我々に見させるのはマルクスである。

潜在的生産があるから、だからこそ、「マルクスは、答えの(……)としてはっきりと言い表わされてはいない形で現前し、この答えの内部で、この空白そのものをある現前 (présence) の空白として、まさに生産し出現させんばかりに、この答えの内部に現前する概念をまったく単純にはっきりと言い表わす (énoncer) という事だけで、言い表わされていない問いを提起することができたのである。マルクスは、言い表わされたものの中に、古典派経済学の答えの言い表わしのもつ (……) として現前する、『労働力』という概念を導入=再確立することにより、その言い表わしの連続性を再確立する。……同時に、それまで問いなき答えが答えていた、それまで未提起の問いを生産する。……その問いは、『労働力の価値は何か』という形で生産される」と、アルチュセールは、以上のように述べている。

アルチュセールは、このような読書を「徴候的読書」と呼ぶ。その内容については拙稿を参照していただきたいが、その問題点はやはり、古典派のテキストとマルクスのテキストの関係にあると思われる。アルチュセール自身が「最大の困難」と述べたところである。アルチュセールは、『資本論』のテキストを二重化する。『資本論』の中には二つのテキスト (古典派のそれとマルクスのそれ) があるとされ、それぞれが、「あますところなく理解された全体」として、一つの地盤や地平や問題意識の構造 (problématique) を構成するものとされているのである。古典派経済学は、一つの完結した=閉じた領域である。だが、それはその理論の領域に囚われている者には見えないが、あるいは別の言い方をすれば、潜在的 (ヘーゲルの an sich) には、その地盤全体を覆す徴候としての問わず語りを含むものである。古典派の理論的地平の「裂け目」と言ってもよい。そして、まるで裂け目の向うに真理が現前しているかのように、問わず語り (不在の概念) をはっきりと言い表わすことで、古典派経済学の体系だったものが、マルクスの体系になるかのように描かれているのである。

アルチュセールは言う。「たしかに、問題は、潜在するものを顕在化するということを意味すると思われる〔生産するという〕語の意味において、生産することである。だがしかし、ある意味では、すでに存在するものを、(既存の材料に目的に適った対象という形態を与えるために) 変形することを意味する。この生産は、生産作業に円環という必然的な形を与えるという二重の意味で、認

識の生産である」と。このように言われた「生産」とは、「新たな問題意識の地盤の創設」と言われるにもかかわらず、既に現存在しているもののある目的のもとでの再生産という円環をなさざるをえない。円環 (cercle, Enzyklopädie) は閉域 (cloture)に通じる。

アルチュセールは言う。

「我々は、このイデオロギー的な問いによって規定されたイデオロギー的空間、必然的に閉じられた……空間から飛び出し、別の場所に、新たなひとつの空間を開かなければならない」。だが、「その空間の外部が外側であれ深みであれ、ただその外部に身を置きさえすれば、閉じた空間から飛び出せるわけではない。この外部あるいはその深みが閉じた空間の外部であり深みであるかぎり、それらは、その空間の自己以外の＝他者内でのその空間の『反復』として、その円環、その空間に依然として属している。この空間から逃れることができるのは、反復によってではなく、この空間の非＝反復によって、唯一理論的に裏づけられた逃亡によってだけである——この逃亡は、……イデオロギー的な立場の再認 (reconnaissance) の構造のただ中で、非認されて (méconnu) いる実在的な問題を提起することを許す、新たな空間、新たな問題意識の根源的な創立である⁽¹²⁾」。これが、『資本論を読む』でのアルチュセールの方向性である。

古典派のテキストは、イデオロギー的な閉域と見なされると同時に、その中では非認されている形で、新たな空間を開くための指標を含むものとして二重化されている。だからこそ、マルクスはその問わず語りをはっきりと言い表わすことで、新たな立場を創設できたということになる。このようなアルチュセールの主張は、批判というものの性質について、我々に興味深い指摘を与えた。だが、「新たな空間の根源的な創設」は、アルチュセールによっても、未だなされたと言い難い。アルチュセールは、それが実は閉域の新たな反復でしかないという困難を最後まで持てあましていたようである。このことは、古典派経済学をひとつの閉じられた空間——イデオロギー、前科学、誤謬等、何と呼ぼうと——と見なし、それに、マルクス (科学、真理) を対置するというやり方は、どんなに新しく見えても、既に現存在しているものの再生産、反復でしかないのだ、ということを示している。

このように考えるならば、我々はこの二重化そのものに疑問を持たざるをえない。古典派の問わず語りは、古典派のテキスト自身が徴候的に語ってしまう、

真理の指標であるとされたが、そのような徴候は、アルチュセールによる古典派テキストの改作によってはじめて生ずるものなのではないか、とも思われるのである。⁽¹⁴⁾

本稿の冒頭にかかげた「形容矛盾」は、古典派の価値論の「急所をつく」(マルクス)ものとして、問わ^ず語^りの一種とも言えるものだが、この「形容矛盾」のマルクスによる分析は、テキストの二重化とは異なる方向性を持っていると思われる。以上のアルチュセールによる問わ^ず語^りの分析をふまえて、マルクスによる「形容矛盾」の分析を考察したい。

4. サミュエル・ベイリーによるリカード批判

古典派経済学の価値論の中に、「形容矛盾」があることを示したのは、古典派のテキストそのものではなく、リカードの批判者である、サミュエル・ベイリーであった。

サミュエル・ベイリー (Samuel Bailey, 1791~1870) は、イギリス経済学史の中ではマイナーな存在とされてきたようであるが、マルクスが、『経済学批判要綱』、『経済学批判』、『剰余価値学説史』、『資本論』といった主要な著作の中で重要視したことから、我が国では戦前から少なくない研究がなされてきた。とくに戦後は、マルクス・ベイリー関係を中心に、ベイリーがマルクスの価値論形成上与えた影響、あるいはマルクスによるベイリー批判の意義が、マルクス価値論を理解する上で重要性を持つものとして研究されてきている。⁽¹⁵⁾

はじめに、ベイリー価値論の骨子を行論に必要なかぎりであ約しておく。⁽¹⁶⁾

ベイリーによれば、まず一般論として、「価値とは、ある対象について人が心に抱く評価 (esteem) を意味する」。それは、「心に生み出された結果」なのであって、「原因」とは本来区別さるべきものである。しかし、「我々は、他の場合にも、ある感情 (feeling) と、それを引き起こした原因とに共通の名称を与え、思考の中で両者を混同することに慣れているので、この場合にもまた、価値を外的な対象の性質だと見なしてしまうのである。我々は心の感情を見逃して、これを起さしめる対象のもつ力のみを、何か外的で独立的なものと考えているにすぎない」。⁽¹⁷⁾ こうしてベイリーは、ある対象の属性としての価値を否定する。

だが、ベイリーにとって、経済学的な価値は、感情一般と同じように論ずることはできない、「特殊な感情」である。「価値という特殊な感情が生じうるの

は、諸対象が選択または交換の対象として同時に考察される時だけである。その時にこそ、「我々は我々の感情を正確に表現する力を獲得する」。例えば、「我々は、1 Aは、我々の評価では、2 Bに等しい、と言う」。これは、「絶対的な評価の表現ではなくて、相対的な評価の表現である」。「Aの価値はそれと交換されるBの数量によって表現され、Bの価値は同様にAの数量によって表現される」。従って、価値を購買力とするA. スミスの定義は、「基本的に正しい⁽¹⁹⁾」と言われる。

だが、ベイリーによれば、価値はあくまでも二物の比較の中にしか存在しない相対的なものであるから、「内在的な価値」あるいは「絶対的な価値」などというものは、「不合理」でしかない。「価値は絶対的または内在的なものを指すのではなく、二つの対象が、交換される商品として、相互に対立する関係をさすにすぎない」のだから、「一物は他物との関係なしに、それ自身で価値を持つことはできない⁽²⁰⁾」と言うのである。これは、交換価値を購買力と規定した上で、それとは区別されるものとして「絶対価値」を把え、その背後に、商品に「入り込む」(enter into) 労働量を想定していたリカードと、決定的に対立する価値論である。

このような立場から、ベイリーはリカードの「不変の価値尺度」の追求を批判する。「価値を一関係とみるこの見解よりすれば、価値は比較される諸対象の一つに関して変動すれば、必ずや他の対象に対しても変動することになる。AのBに対する価値は変動しうるが、BのAに対する価値は変動しえない、と考えることは不合理である⁽²¹⁾」とベイリーは言う。また、リカードが投下労働量としての「絶対価値」を考え、不変の労働量を価値尺度としようとした点については、そのような「不変の価値尺度」は、投下労働量の既に知られている第三の商品を想定しない限り、ありえないと言う。労働量が不変の価値尺度であるというリカードの主張は、「諸商品を生産するのにそれぞれ必要とされる労働量が知られている時には、諸商品の相互関係における価値はこれによって決定される⁽²²⁾」、と言っているにすぎない、とベイリーは言うのである。価値尺度はそれ自身価値量が不変のものでなければならない、というリカードの考えに対する批判として、これは妥当なものである。ベイリーが(マルクスもまた)言うように、「貨幣は絶えず価値において変動しうるものであるが、しかも価値がまったく変動しないものであるかのように、十分な価値の尺度となりうる」

のであって、「あるものが価値の尺度としてすぐれているということは、それ自身の価値が可変であるということとはまったく無関係」⁽²³⁾なのである。このように、ベイリーは、貨幣の価値変動がその価値尺度としての機能を何ら損うものではないことを見抜いた。マルクスはこの点を、ベイリーの功績の一つとして高く評価した。ベイリーは、不変の価値尺度は何かという、リカード学派を袋小路へと追いつめていた難問題を退けたのである。

だが、ここで、ベイリーが価値尺度を考察する際に、あらかじめ貨幣を前提した上で、貨幣によってこそ、諸商品は「一つの共通な名称に還元される」のだと考え、この共通名、即ち価格で表現された商品の価値を前提することによって、諸商品の価値を相互に比較し、測定しているということに注意しておかねばならない。ベイリーによれば、価値とは、二商品の交換関係の中にしか存在しない、純粹に相対的なものであって、価値は商品の属性として内在的に存在するものでもなければ、商品の外に独立して絶対的に存在するものでもない。

「商品の価値は、他のある商品との交換上の関係を指すのだから、我々はそれを、それが比較される商品が何であるかによって、貨幣価値、穀物価値、布価値等と呼ぶことができよう。それ故、そこには無数の種類の価値が、すなわち存在する商品の種類と同じ数の価値の種類があり、しかもそれはすべて等しく実在的 (real) であり、名目的 (nominal)⁽²⁴⁾である」とされる。そして、これら「異なる名の」諸価値が、量的に比較しうるのは、それらが貨幣という共通名 (価格) による表現に還元されるからである、とベイリーは主張したのである。このようなベイリーの立場は、広松渉以来言われているように、徹底した「価値ノミナリズム」であると言えよう。

5. マルクスによるベイリー評価

マルクス価値論の形成史の研究によると、『経済学批判 (第一分冊)』(1859年6月) から『資本論』(初版, 1867年) までの間に、マルクスの価値論には重要な変化があったこと、その変化に、マルクスのベイリー批判が重要な意味を持った⁽²⁵⁾ということが、ほぼ確定的な見方となっているようである。

確かに、『経済学批判』と『資本論』の間には、価値論に関して、後述するように大きな叙述の変更があり、古典派経済学に対する評価も変化している。『批判』では、リカードは「古典派経済学の完成者」と高く評価されたが、『資

本論』では、価値形態論の無理解を強調する方向へと、その評価が変化していることは、周知のことからであろう。これに対して、ベイリーは、そのノミナリズムを批判しながらも、「リカード学派の急所を突いた」人であり、「価値形態の分析に携わってきた少数の経済学者」の一人であると、高い評価（リカード以上というわけではないが）を与えられている。従来、マルクスは古典派経済学の批判的継承者であり、その価値論に基本的に（労働価値説という点で）同意しながら、古典派を批判発展させたといった観念が根強く、古典派とマルクスの差異は比較的軽視されてきた傾向がある中で、このような、ベイリーを介したリカードの再検討は、さらに研究されるべき課題であると思われる。

さて、『資本論』の価値論の中で、マルクスがリカードを批判、評価しているのは、次の点である。

まず第一に、ベイリーは「価値形態と価値を混同した」ということ。「S. ベイリーのように、価値形態の分析に携わった少数の経済学者が、何の成果も達成できなかったのは、第一に、彼らが価値形態と価値とを混同しているからであり、第二に、彼らが実際的なブルジョアの生の影響下^{なま}にあって、初めから、もっぱら量的規定性だけを眼中においているからである」、⁽²⁷⁾とされている。ここで、「価値形態と価値の混同」というのは、別の言葉で言えば、交換価値と価値の混同ということである。（「価値形態、すなわち交換価値」⁽²⁸⁾）。マルクスによれば、「交換価値とは、それと区別される内実の表現方式、すなわち『現象形態』⁽²⁹⁾」なのである。だが、マルクスは、ベイリーによるリカード批判の分析を介して、この区別をはっきりと規定し、叙述したのだ——『批判』においては、この区別は明確ではない——、ということを指摘しておかねばならない。

ベイリー批判の第二の点は、ベイリーの言うように、「ある商品の価値は、他の商品の数量によってしか表現されない」のであり、「ある商品は、貨幣価値、穀物価値、布価値等といった種々様々な価値を持つ」のだとしても、このことは、価値の概念規定そのものを否定することにはならない、ということである。マルクスは言う、「等価物が価値等式においてつねに一物、すなわち、一使用価値の単に一定量の形態をもっているにすぎないというこの事実を、皮相に理解したことは、ベイリーをその先行者や後続者の多くとともに誤り導いて、価値表現においてただ量的な関係だけを見るようにさせた」⁽³⁰⁾。また、「彼〔ベイリー〕は、このように、同一商品価値の相対的表現の雑多さを指摘する

ことによって、価値の一切の概念規定を破壊したと妄信している⁽³¹⁾と。

第三の点は、ベイリーは価値の「現象形態」を絶対化し、その内実、その後にかくれている真の関係を見なかった、という批判である。すなわち、「ベイリーは、リカードを批難して、彼〔リカード〕は交換価値を、相対的にすぎないものから、何か絶対的なものに転化させたとやっている。逆だ。彼〔リカード〕は、これらの物、例えばダイヤモンドと真珠とが交換価値として所有している仮象の相対性（Scheinrelativität）を、この仮象の背後にかくれている真の関係に、すなわち単なる人間労働の表現としてのそれらの物の相対性に、還元したのである」、という批判である。

マルクスのベイリー批判は、端的に言って、ベイリーが価値の相対的な表現様式を絶対的なものと考えて、その表現様式の内実を見なかった、という点にある。そして、マルクスは、このようなベイリーの批判を介して、リカード学派の痛い所をえぐり、価値と交換価値＝価値形態の区別を明確化させ、『資本論』におけるその叙述を作り上げたものと思われるのである。

6. 「形容矛盾」の分析と「価値導出」の分析

いわゆる「価値導出」の分析の冒頭で、マルクスは交換価値の現象を提示している。「交換価値というものは、何よりもまず、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される際の量的な関係、すなわち比率として現象している。すなわち、時と所によって永続的に変化しているような関係として現象している」、と。このことは、誰の目にも明らかな必然的な現象である。従って、ベイリーのように、価値（交換価値）を相対的なものと考え意識には根拠がある。マルクスはこのような、日常生活の意識を分析の出発点におく。

この現象を単純に反省すると、「交換価値とは、何か偶然的で純粋に相対的なもののように思われる。それ故、商品に内的な、内的な交換価値（固有の価値）などというものは形容矛盾であるように思われるのである」⁽³³⁾。これが、ベイリーに対する言及でもあることは、容易に理解される。だが、マルクスは、ここではベイリーの名は出さず、重商主義者N. バーボンをして、こう言わせている。「何ものも内的な交換価値を持たない」⁽³⁴⁾、と。つまり、マルクスはここで、俗流経済学のバーボンを登場させ、スミスやリカードが二分して整理した、使用価値と交換価値という概念の不備をついていると思われる。ベイリー流の、

価値の（交換価値の、と変更されているが）相対性を必然的な現象として肯定することによって、内在的価値と言った古典派の「形容矛盾」を浮かび上がらせているわけである。

さらに、バーボンその人もまた「矛盾」を犯さざるをえなかったことが、指摘される。⁽³⁵⁾バーボンの立場は、内的な価値を否定するものであり、そのような言葉使いは形容矛盾だ、すなわち言葉使いの誤りでしかなく、そんなものは存在しないものである、というものである。このような立場は、エンゲルスの例にたとえると、経済学のプリーストリやシュレーレであるリカードとスミスに対して、いわば純粹燃素説の立場とも言うべきものであろう。バーボンがスミスやリカードと異なるのは、自分も手にしてしまっている事柄（注35参照）を否定し、見まいとする俗流ぶりだけである。だが、マルクスは、古典派の立場をよしとしてバーボンの俗流を非難しているのでもなく、ましてバーボンやベイリーに荷担して古典派の欠点を指摘しているのでもない。マルクスにとっては、古典派も「内在的な価値」を言ってしまっただけなのであり、それに正しい名（概念）を与えることもできなかつたのである。だが、マルクスは、古典派の形容矛盾を誤りとして捨てさるのではなく、「事柄をもっとつっこんで考察しようではないか」と、「形容矛盾」という事柄の分析を始めるのである。それは、この事柄に十全な表現を与える作業でもある。

マルクスは、こうして、古典派経済学にベイリー（バーボン）の批判をぶつけることで、古典派の「形容矛盾」を抉り出し、この「内在的交換価値」と呼ばれているものこそ、分析の対象（—価値）であることを示すのである。このようなやり方で、マルクスは、古典派経済学の「価値」とも異なつた、「内在的交換価値」という、自己の分析の対象を提示することができるのである。このようなやり方は、古典派のテキスト自身が問わず語りをももの語り、そこへ介入することによって古典派のテキストの連続性を再確立するといった、テキストの二重化の手法とも異なるものであろう。

事柄の分析に入ろう。「ある商品、例えば1クォーターの小麦は、 x 靴墨、 y 絹、 z 金等々と、簡単に言えば他の諸商品と多様極まる比率で交換される。だから、小麦は唯一の交換価値を持つのではなく、種々雑多な諸交換価値を持っているのである。ところが、 x 靴墨、 y 絹、 z 金等々は、どれも同じように1クォーター小麦の交換価値なのだから、 x 靴墨、 y 絹、 z 金等々は互いに置き

換えることのできる、すなわち互いに等しい大いさの交換価値であるに違いない。このことから、第一に、同じ商品に妥当している諸交換価値は、ある同等なもの表現しているということ、第二に、交換価値というものは、それ自身とは区別されるある内実の単なる表現様式、『現象形態』でしかない、ということ、この2つの帰結が導かれるのである(K.,S.51)。ここでは、ある商品は種々雑多な諸交換価値を持つ、とベイリーの主張が肯定された上で、次に、 x 靴墨、 y 絹、 z 金等々はどれもみな、1クォーター小麦の交換価値なのだから、と交換の両項が逆転されている。ここでは、1クォーター小麦はこれらの諸交換価値の量を測る尺度にされているわけである。このようなとり違えが生じるが故に、それらは量の異なる諸交換価値へ、さらに、諸交換価値から交換価値なるものへの還元が可能なのである。

こうして我々ははじめて次の例へと進むことができる。「さらに、小麦と鉄という二商品を例にとろう。両者の交換比率がどうであれ、この関係は、つねに所与の定量の小麦が何らかの定量の鉄と等置されるという等式で、例えば、1クォーター小麦 = a ツェントナー鉄という等式で、代理表現できる。この等式は何をもの語っているか？相異なる二つの物の中に、同じ大いさの、ある共有なものが、すなわち、1クォーター小麦の中にも、 a ツェントナー鉄の中にも、同一の大いさのある共有なものが現存在している、ということである。かくして、両者はある第三者に等しい。すなわち、絶対に (an und für sich) この両者のうちのどちらでもない、第三のものに等しい。それ故、両者のいずれも、それが交換価値である以上は、この第三者に還元されるに違いないのである」(K.,S.51)。

我々は、前の例で、1クォーター小麦が諸交換価値の量の尺度として働くとりちがえが生じるが故に、様々な種類の異なる量を持つ靴墨、絹、金等の価値量を等しいとみなし、諸交換価値から交換価値なるものへの還元ができるのだ、ということを見た。1クォーター小麦 = a ツェントナー鉄という等式は、この媒介をへてはじめて成立するものなのである。ベイリーは、種々雑多な交換価値を固執して、それらを「交換価値というもの」へ還元する過程を認めなかった。にもかかわらず、彼が諸商品の価値量を比較できたのは、価格を前提したからであった。ベイリーは、貨幣の価値尺度機能を認めたが、このような、交換関係の逆転がつねに生じているという意味での、1クォーター小麦という商

品の貨幣性に気づきはしなかった。これに対して、古典派が、交換価値とは区別されるものとして、内在的価値を言えたのは、このとりちがえに支えられた、還元を前提としている。マルクスはこうして、古典派経済学が種々雑多な諸交換価値とは区別される内在的な価値と、その背後に、価値の実体としての労働⁽³⁶⁾を考察することができた根拠を分析したのだと言える。

一たん、1クォーター小麦 = a ツェントナー鉄という等式が成立した後では、我々はその両項に、ある同等なものが存在することを認識することができる。なぜなら、クォーター（体積量）とツェントナー（重量）という異なる種類の量（使用価値の量）が、互いに比較しうる以上は、そこに何らかの共通の単位が存在しなければならないからである。

この共有なものをつきとめる抽象の過程は、この等式を根拠としてなされる。そうして、商品は、「無差別な人間労働の、すなわち、その支出の形態を考慮することのない、人間労働力の支出の、単なる膠状の物」として、このような「妖怪のような対象性」を持つ、「社会的実体の結晶として、価値なのである」と結論されるのである。

7. 価値導出という分析の意義——結び

以上述べてきたことを簡潔に言えば、形容矛盾の分析は、ベイリー（バーボン）による古典派の批判を、古典派にぶつけることによって、古典派経済学の中に形容矛盾を抉り出し、そこに自己の分析の対象を提示するものであった。そして、価値導出の分析は、古典派経済学が交換価値という多種雑多で常に変化する現象の中に、それとは区別される内的統一、すなわち内在的価値を洞察し、その実体が労働であると見抜くことができた根拠を分析するものであった。それは同時に、価値の相対性という現象を絶対的なものとして固執し、自らも貨幣を前提に行なってしまうにもかかわらず、種々雑多な交換価値→1クォーター小麦の量的に異なる交換価値→交換価値一般という還元を否定した、ベイリーに対する批判ともなっている。

さらに、古典派経済学に対しては、交換価値はストレートに不変の価値尺度たる労働へと結びつくものではなくて、交換価値はそれとは区別されるある内実の表現様式でしかないことをはっきりと指摘し、そのことによって、この内実を分析するという課題を示したのである。これはまた、表現様式としての交

換価値が分析されなければならない対象としてあることをも示すものである。交換価値が表現様式である以上、その分析は、量的規定性のみにとらわれていた古典派にはとうてい成しえないものだからである。このような、分析の対象を提示するという意味で、形容矛盾と価値導出の分析は、『資本論』第一章の出発点であると言えよう。それは、冒頭から既に古典派経済学の批判が始まっているということでもある。「価値導出」の分析は、本稿で扱った部分だけでなく、抽象的人間労働の析出までも含めて論じる必要がある。さらに、価値形態論も含めて、価値導出の分析の意義を考察する中で、古典派の「労働価値説」の我々にとっての意義を明らかにしなければならないであろう。これらは今後の課題である。

註

- (1) Karl Marx, *Marx-Engels Werke*, Dietz, Bd.23, S.51.邦訳、岩波文庫版『資本論』(一),70頁。この邦訳書では、向坂逸郎氏は「一つの背理」と訳しているが、*contradictio in adjecto* は形容詞における矛盾、すなわち「四角い円」とか「熱い氷」といったように、ある語にその語の概念と矛盾する形容詞が結びつけられる事態を指す。「形容矛盾」と訳されるのがむしろ通例である。(高島素之訳, 1925年, 長谷部文雄訳, 1946年。)なお引用文は筆者が邦訳書とは異なって訳した場合がある。傍点は筆者。
- (2) 『資本論』英語版へのエンゲルスによる序文。ibid., Bd.23, S.37.邦訳, 同上, 47頁。
- (3) ibid., S.38.邦訳, 同上, 47~48頁。
- (4) およそ以上のようなエンゲルスの説明に、もう一つの事実をつけ加えておきたい。シェーレの考えによれば、「火気体」(酸素)の中で物体を燃やした際に、残留物の重量は燃焼の前よりも減少するはずなのだが、実験によって逆の事実、すなわち燃焼前よりも燃焼後の方が重量は増すという結果が得られた。そのことが、燃素説の終焉をもたらす一つの重大な契機となった、ということである。燃焼する物から燃素が分離する、と考えるよりも、何ものかが結びつくのだと考えるべきである、という発想の転換には、この事実が大きな役割を果たした。
- (5) ibid., Bd.24, S.22,エンゲルスの第二巻への序文。邦訳, 同上(四), 29~30頁。
- (6) ibid., Bd.24, S.23,邦訳, 同上, 30頁。
- (7) この点の分析に関しては拙稿を参照されたい。岡はる代,「アルチュセール哲学における『批判』の問題に関して」,『一橋研究』,第14巻第一号,1989年4月号。
- (8) Louis Althusser, *Lire le Capital*, I, Maspero, 1975, p.20~21.強調は原文。

邦訳、今村仁司訳、『資本論を読む』、合同出版、24～25頁。引用は邦訳書と異なる訳出をしているか所もある。

- (9) *ibid.*, p.22.邦訳、同書、26～27頁。
- (10) 岡はる代、前出論文。
- (11) *ibid.*, p.37.邦訳、同書、42頁。
- (12) *ibid.*, p.63.邦訳、同書、67～68頁。
- (13) アルチュセールの困難点の論究としては、鈴木一策、『『他者』の問題と主体の实在論——アルチュセールとラカンにおける唯物論』(上)(下)、季刊『窓』、1号、1989年秋、2号、1989年冬、窓社がある。
- (14) 鈴木論文を参照。(上)、202頁。また、マルクスは労賃の章で古典派経済学を分析した際、「それ自身の分析の成果についての意識の欠如、問題にされている価値関係の最終的に適切な表現としての、『労働の価値』『労働の自然価格』等々という諸範疇の無批判的な採用は、後に見るように、古典派経済学を解きたい混乱と矛盾に巻きこんだのだが、それは俗流経済学に対しては、原則としてただ外観にのみ忠実なその浅薄さのために、確実な活動地盤を提供したのである。」(Marx・Engels Werke, Bd.23, S.561.)として、「混乱と矛盾」の分析に向かう方向を示唆しており、必ずしも、経済学の間わず語りを言い表わすことによって経済学を覆す、といった方向をとっているとは思われない。
- (15) Edwin Seligman, "On Some Neglected British Economists", *Economic Journal*, Vol.13, 1903, 平瀬己之吉訳『忘れられた経済学者たち』未来社、1955年、参照。セリグマンは、ベイリーを「最も鋭いリカード批判家」として重視している。
- (16) マルクス＝ベイリー関係の研究史については、石塚良次、「価値形態論の問題像——マルクスのベイリー、リカード批判に触れて」、専修大学大学院『経済と法』第16号、1982年9月。を参照。
 ベイリーの価値論の研究では、大内秀明『価値論の形成』、東京大学出版会、1964年、玉野井芳郎「価値論におけるリカードとベイリー」、『経済学論集』第20巻5号、1951年、永田清「サミュエル・ベイリーのリカード批判」、『三田学会雑誌』、第23巻1号、吉田憲夫「サミュエル・ベイリー価値論の基本構成」、早大大学院『商学研究科紀要』第3号、1976年、等を参照した。
 マルクス・ベイリー関係の分析では、これらの他、竹永進「S・ベイリーの価値論と60年代初頭のマルクス」、『経済学雑誌』、第77巻1号、1977年7月、有江大介「価値ノミナリズムとマルクス」、『土地制度史学』、第103号、1984年、及び、広松渉『資本論の哲学』、現代評論社、1974年、などが主題的に論究している。
- (17) ベイリーの著作としては、1967年に出版された著作集の復刻版を用いる、Samuel Bailey, *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, [1825], Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967. この復刻版には、表題の『価値の本性、尺度、ならびに諸原因に関する批判的論究』(以下『論究』とする)の他に、マルクスが言及した他の著作、*id.*, *A Letter To A Political Economist*

- Occasioned by An Article in The Westminster Review On The Subject Of Value* [1826], (『ある経済学者への手紙』), id., *Observations On Certain Verbal Disputes In Political Economy...* [1821], (『経済学における若干の用語論争の考察』), 及び, id., *An Inquiry into Those Principles Respecting The Nature Of Demand And The Necessity Of Consumption...*, (『需要の性質と消費の必要とに関する原理の研究』), が含まれている。『論究』には邦訳書, 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』, 日本評論社, 1941年, がある。
- (18) S.Bailey, *A Critical Dissertation*, p.1~2.
- (19) 以上, *ibid.*, p.2~4.
- (20) 以上, *ibid.*, p.4~5.
- (21) *ibid.*, p.5, 13, 30.
- (22) *ibid.*, p.255.
- (23) Bailey, *Money and its Vicissitudes in Value*, 1837, p.9~10.
- (24) Bailey, *A Critical Dissertation*, p.39.
- (25) 広松渉, 有江大介, 竹永進, 各前掲論文を参照。M・E・L研究所編『マルクス年譜』, 青木書店, 1960年, によると, マルクスがベイリーの著作を研究したのは1859年の秋から冬にかけてである(『批判』刊行直後)とされている。
- (26) *Marx-Engels Werke*, Bd.23, S.77.邦訳, 前掲書, 116頁。
- (27) *ibid.*, S.64.邦訳, 同書, 92~93頁。
- (28) *ibid.*, S.62.邦訳, 同書, 88頁。
- (29) *ibid.*, S.51.邦訳, 同書, 71頁。
- (30) *ibid.*, S.70.邦訳, 同書, 104頁。
- (31) *ibid.*, S.77.邦訳, 同書, 116頁。
- (32) *ibid.*, S.98.邦訳, 同書, 150~151頁。
- (33) *ibid.*, S.50~51. 邦訳, 同書, 70頁。以後、『資本論』からの引用は本文中にページを示す。(例, K., S.50~51)。なお, 傍点は筆者。
- (34) バーボンの原文は, Nothing have an intrinsick value.であるが, マルクスはこれを Nichts kann einen inneren Tauschwert haben.として, value (価値) を Tauschwert (交換価値) に変えている。この改作があるからこそ, 内在的価値(交換価値)が形容矛盾であることがはっきりと示されるのである。Nicholas Barbon, *A Discourse Concerning Coining the New Money lighter.*, republished in 1971, Gregg International Publishers, p.6.
- (35) 「交換価値が等しければ, ある商品種は他の商品種と同じくらい良い (good).」(Barbon, *ibid.*, p.53.) ここで, 交換価値とは, 2商品の品質の量を測る尺度となっている。バーボンは価格を前提にしてこう言えるのだが, ここでいう交換価値とは, 相対的なものとは言えない。
- (36) 『批判』には以上のような分析は全く見られない。『批判』においては, 交換価値なるものから始まり, それが「多様な外見にもかかわらず, 同じひとつのものを表示している」と述べられているだけである。『経済学批判』, 岩波文庫, 23頁。